

いつも心に川がある

堀川まちづくりの会企画展

舟運・筏・川遊び 堀川のにぎわい

舳で暮らす人々

かつて、名古屋港に入った船に積み降ろしする荷を積んで、堀川や中川運河などではたくさん舳が活躍していた。

名古屋港では明治44年に名古屋駅と結ぶ臨港線が敷かれ、鉄道輸送が行われるようになった。しかし、トラックが普及していない時代、鉄道駅から工場などの事業所への運搬は、輸送力が小さい馬車や大八車で行うしかなかった。川沿いや川に近い所への輸送は、舳輸送が一番効率的だったのである。

このため名古屋港へ入港した船は沖に停泊し、本船から舳へ直接積み降ろしする沖荷役が盛んに行われていた。

舳で暮らす人々

舳輸送は、一般の工場や商店などと異なり、始業・終業の時刻が決まっていない。本船の入出港に合わせて荷役をし輸送するしかなく、早朝や深夜の仕事になることもある。他の港などへの輸送も行っており、何日も家に帰られないこともある。このため自宅から舳に通勤するよりも、職住を一致させ舳を生活の場にする方が合理的であった。舳にはとも（船尾）に船室が造られ、水上生活が出来るようになっていた。

大正10年には、堀川・新堀川を行き来している舳が450隻あり、日常の飲料水を確保するのに困っていたため、舳組合が許可を受けて給水栓を沿川に設置している。戦争が激しくなり、生活物資の統制が始まった頃に水面町町内会（事務所は名港舳組合内）がつくられ、中川運河船溜などで一時期は2,000世帯もの人が舳で暮らしていた。トラック輸送が普及すると共に舳や水上生活者が減ったため、町内会は昭和41年5月7日に解散している。

水上児童寮

水上生活の大きな問題は、子どもの教育だ。学校に通うようになると、舳からの通学は難しく祖父母や親戚に預けるしかなかった。

このため、昭和9年に築地保育園が開園した時に夜間託児所が併設され、水上生活者の子ども（小学生）を預かるようになった。17年には名古屋市水上児童寮が現在の港栄三丁目に開設され、学齢期の子どもが入寮して国民学校（小学校）に通学していた。しかし、戦争が激しくなり19年3月にいったん閉鎖している。

戦争が終わり昭和23年11月に養護施設若葉寮の分室として再開し、25年4月に水上児童寮として独立した。その後、水面町解散に伴い42年4月に港児童寮に改称したが、45年には廃止された。

この間、昭和31年10月には、水上生活者のための保育園が児童寮付設保育園として設置され、翌年6月に港保育園になっている。

水上生活の人も入浴した 弁慶湯

かつて五條橋南西に弁慶湯という銭湯があった。

堀川を通航する舳の人たちは、五條橋の共同物揚場に舟を係留して円頓寺商店街で買い物をした。その後、舳には風呂の設備がないので、弁慶湯に来て久しぶりの入浴を楽しんで舟に帰って行ったという。



中川口の舳溜 奥に見えるのは中川口閘門 昭和41年
(名古屋港管理組合蔵)



船に住む 臼井薫氏撮影（北区役所蔵）



七里の渡し附近の舳 中央の舟には子どもの姿



左:五條橋上から見た弁慶湯と堀川の共同物揚場 平成14年
右:五條橋から円頓寺方面を望む 昭和11年(名古屋都市センター蔵)